

オトギリソウ

牧 幸 男

長井龍男氏が「9月に入ってからある日、私は身边を振り返る。少年期もそうであったし、若い時も老いたいまもそうである。別に珍しいことでことではあるまい。四季の変化にめぐまれた島国の人間の生理が、おのずとそうさせるのである。」と書いている。

9月、過ぎ去った夏をなんとなく振り返る自分を見つけることがある。未だ、真夏の太陽が照る日があっても、それでも日差しの勢いは日一日と秋めいてくる。来年の今頃、逝行く夏を偲びことができるだろうか。最近の私は、身边を振り返る思いが年毎に重くなって行く気がする。若い頃は、逝ゆく夏の寂しさを唯感じる程度であったが、^{よわ}年齢80代後半になると、自分の身の寂しさが気になるようである。秋の入り口はそんな時でもある。

植物には夏の訪れまで盛んに成長するものと、夏から秋に盛んに成長するものがある。オトギリソウは、夏から秋に私達の目を楽しませてくれる代表である。我が国の全土、朝鮮半島、中国大陸に分布する。日当たりの良い道ばたや草地、山野、疎林、道端でよく目にするオトギリソウ科の多年生草本である。高さ30~60cm程に成長、茎は円柱形で緑色、葉は対生し茎を抱き、皮針形で先端は丸く全縁である。すかしてみると葉の中に黒色の油点が散在するので類似植物と区別が可能である。夏から秋にかけて茎の頂部から分枝し直径1.5cm程の小さな鮮黄色五弁花を次々と数を増やして開く。花は日中だけ咲き、1日で終わる1日花で、花をつぶすと紫色になる。

オトギリソウ属は世界に350種程存在し、わが国をはじめ北アメリカや中国に多く生育している。『新訂牧野新植物図鑑』を調べると、オトギリソウの名前を冠した植物が9種、即ちツキヌオトギリソウ(元寶草)、フジオトギリソウ(富士弟切草)、コオトギリ(小第切草)、イワオトギリソウ(岩弟切草)、ニッコウオトギリソウ(日光弟切草)、シナノオトギリソウ(信濃弟切草)、ハチジョウオトギリソウ(八丈弟切草)、ダイセンオトギリソウ(大山弟切草)、エゾオトギリソウ(蝦夷弟切草)が記載されている。

オトギリソウを有名にしたのは、寺島良安(1654年~没年不詳)著『和漢三才図会』(1712)の湿草類の弟切草の項の記述に「相伝フ。花山院(花山天皇)ノ朝(御代:980~986)ニ鷹飼アリ。晴頼ト名ズク。粗ノ業ニクワシキコト神ニ入ル。鷹ガ傷ヲ被ムルト草ヲモミテ^{これ}之ヲツクレバ^い則チ癒ユ。人ガソノ草ノ名ヲ乞ヒ問ヘドモ、コレヲ秘シテ言ハズ。然ルニ家ニ弟アリ。ヒソカイ之ヲモラス。晴頼大イニイカリ之ヲ刃傷ス。(世人)コレヨリ鷹ノ良薬タルコトヲ知り、弟切草ト名ヅク……」である。オトギリソウには、このときの弟の血しぶきが草に残り、葉に見られる黒点となったと言われている。



弟切草



西洋弟切草

類似植物にセント・ジョーンズ・ワート（セント・ジョーンズ ワート 聖ヨハネの草 St. John's wort）がある。（ヨハネの英名はジョン）別名を西洋弟切、学名は *Hypericum perforatum* である。主にヨーロッパに自生しているが、後にアメリカへも伝播し多くの草地で野生化している。繁殖力が強く、長野県薬剤師会薬草の森りんどう（長野県菅平薬草栽培試験地）でも同様野生化している。植物名は聖ヨハネの日*の頃までに花が咲き、伝統的にその日に収穫されたためその名が付いた。根には赤い斑点があるが、その斑点が現れるのは聖ヨハネ（聖ジョン）が首をはねられた日（6月24日）であることに由来している。この斑点は「聖ジョンの血」と呼ばれている。この日に摘んだこのハーブを家の中に吊ると、魔除け、雷よけになる習慣が生まれた。セント・ジョーンズ・ワートの医療的利用の最初の記録は古代ギリシアにまでさかのぼることができる。現在は、うつ病や不安障害の一般的な処置として用いられている。我が国では主にハーブティーとして用いられているが、生薬としての利用は無い。

注*：洗礼者ヨハネの誕生日とされる6月24日（夏至）である。キリスト教で、誕生日が聖名祝日となっているのは、イエス・キリスト、聖母マリア、そしてこの洗礼者ヨハネの3名だけである。

弟切草とセント・ジョーンズ・ワートの区別は困難である。開花時期は後者が少し早い、草丈は後者の方が20cm程高く葉がやや細いこと、葉を潰すとレモン臭がする程度であろう。

この植物は、わが国で古くから薬用に使われていたこともあり、詩歌に詠われてきた。

秋の野に 未だ枯れ残る 青薬 飼ふてふ鷹や 差羽なるらん 藤原定家

うたかたの 哀れと見るや 薬師草 黒田湖山

植物名の由来は、前述の伝説にちなんだもので、漢名は小連翹しょうれんぎょうが使われる。別名は薬師草、青薬、小連翹、オトギリスなどがある。別名の由来はいずれも伝説によっている。学名は *Hypericum erectum* で、属名はギリシア語の hypo(下に) + erice(草むら)で、種小名は直立する意から、草むらに直立する植物となる。

薬用は生薬名を「小連翹れんぎょう」と呼び、主に民間療法に使われる。伊沢凡人著『和法わいはう』には、佩芳園主人著『経験千方』(1817)に煎じ液を挫傷、深見常安著『秘方妙薬集』(1780)に胡麻曲につけ置き切疔、衣関順庵著『諸国古伝秘方』(1817)に刻みを寸白や下劑に、村井琴山著『和方一千方』(1782)に細かにし行水(肌が向けるほど付けよの意)でタムシ対策、宇田川玄真(1769~1834)訳述『和蘭薬鏡』(1805)に嗽咳、声嘔、肺傷勞咳の記述がある。その他良く知られた効能は、のどの痛み、風邪の咳、口内炎、扁桃炎、歯痛には煎じ液をうがい薬として利用したり、切り傷、腫れ物、湿疹、かぶれ等に利用もある。

生薬として弟切草の市場流通は、現在栽培品が主である。栽培に当たって種子は非常に小さいので、採取時、播種に注意が必要である。詳しい栽培方法は長野県薬草産地づくり推進協議会作成の『薬草栽培マニュアル』(2019)を参考にされたい。

昔から薬草として知られていたが、秋の草紅葉が美しいので、茶花としても珍重されている。

花言葉は「怨恨」「迷言」「敵意」である。



弟切草の種子